日本初の神経難病に特化した病院
積み重ねた実績で神経難病患者を力強くサポート

ザ・プロフェッショナル The Professional

北海道神経難病センター
北祐会神経内科病院

〒063-0802 北海道札幌市西区二十四軒2条2丁目4-30
TEL.011-631-1161　FAX.011-631-1163
http://www.hokuyukai-neurological-hosp.jp/
休診日：土・日・祝
予約受付：地域医療連携室 011-631-1169　予約受付時間：9:00～16:00

難病を正確に見極める、神経内科のエキスパート

北祐会神経内科病院は、昭和57年、日本初となる神経難病に特化した病院として開設された。当時北海道の大学に神経内科の診療科講座はなく、医療者にすらその内容は知られていなかった。そのような時代に、神経難病に苦悩する患者が入院できる施設の必要性を訴えたのが、後に北海道大学医学部神経内科初代教授となる田代邦雄医師と共に神経内科診療班を設立した、濱田毅・前理事長だ。「こうした経緯から当院はパーキンソン病、脊髄小脳変性症、ALS（筋萎縮性側索硬化症）、多発性硬化症、ギランバレー症候群、慢性炎症性脱髄性多発神経炎（CIDP）、筋ジストロフィー、ミオパチーなど筋疾患を含む神経難病の診療に特化しています。神経内科をはじめ、整形外科や脳神経外科から紹介される患者さんが多い点が当院の特長の1つ。顧問に迎えた田代先生の影響もあり、北海道のみならず、道外からも患者さんがいらっしゃいます」と濱田晋輔・現理事長は話す。周辺病院と連携し、血管障害や脳腫瘍が原因だと判断した場合は、速やかに紹介できる体制も構築している。

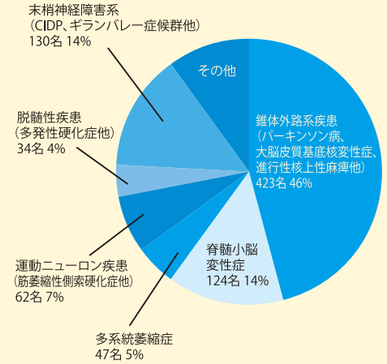
同院の最大の特長は、9人もの神経内科専門医が集う点だ。1人ひとりが神経難病の専門領域を持ち、指導的役割も担っている。濱田理事長は特にパーキンソン病の診療に精通。「正確な診断、適切な治療と細やかな支援、生活環境の整備」を同院の診療理念の1つに掲げる。問診によって疾患を推測した上で、自らの手や器具を用いて全身の運動反応（反射）を調べる神経学的検査を駆使し、原因が脳や脊髄、末梢神経、筋肉のどこにあるのかを判断。採血や髄液検査、針筋電図検査などによって裏付ける。その上で必要に応じて画像検査や核医学検査などをオーダーし、より正確な診断を追求している。「器械による検査と異なり、神経所見は訓練された医師の手が必要であり、神経内科医としての経験がいかされています。数多い神経疾患のどれに当てはまるのかを正確に見極めることに力を尽くしています」

同院には世界でも数例しか報告されていない、稀少な症状を抱える患者が受診し、診断の結果や治療方針が確定しづらいこともある。そのような時も同院の誇る神経難病治療のスペシャリストが全員集い、必要な検査・治療の方針を検討する。北海道大学や国立精神神経センター、更には海外の医師とのネットワークも活用し、最善の治療法を模索する。「そのような稀少な症例を含め、目の前の患者を丁寧に診察し、日本神経学会をはじめ、世界に向けて報告・発信することも私たちの重要な役割です。全世界で同じような症状に悩む患者さんは、必ずいらっしゃいます。その診療の際、当院の診断や治療の情報が必ず役立つと考えています」と濱田理事長は語る。

理事長　**濱田 晋輔**

はまだ・しんすけ●北海道大学病院神経内科、美唄労災病院神経内科、市立函館病院神経内科、帯広厚生病院神経内科勤務を経て、現職。日本神経学会認定神経内科専門医

2015年度疾患別入院患者数
(2015年4月～2016年3月)



※延べ入院患者数

ガイドラインの上を目指すオーダーメードの診療

同院は、患者1人ひとりに応じたオーダーメードの診療を提供することにも努力を惜しまない。例えばパーキンソン病の主な症状の1つである、手が震える「振戦」は無いものの、動作が緩慢になる「無動」だけがあらわれているケースや便秘、排尿障害、精神症状、認知症などの非運動症状を認めるケースなど、患者の症状はさまざま。苦悩する点も性差や個人差で異なる。そこで年齢や仕事の状況、生活サイクルなどに応じ、効果や副作用が微妙に異なる薬剤を使い分け、希望にそった治療を提供する。また多発性硬化症などの再発性の免疫疾患に対してはステロイドの静注療法を主軸に、再発を遅らせたり、再発時の症状を軽減したりすることを目的とする、予防的な投与も積極的に取り入れる。「ガイドラインに配慮し、更にその上を行くような治療を目指しています」

神経難病に特化した同院は、リハビリテーションや看護のスタッフも、経験が豊富だ。その経験をいかし、必要に応じ患者の退院前に自宅を訪問し、在宅復帰に向けた環境の整備を徹底する。「神経難病の患者さんはADLが悪化しているケースが多く、症状は多岐にわたります。当院の充実した専門スタッフが協力し、患者さん1人ひとりをサポートしています」と同院の森若文雄院長。介護保険や身体障害者手帳といった社会的なサポートの取得も手助けし、患者の生活の向上に全力を挙げる。「難病に悩む患者さんの就労の事情など、社会的な状況を理解しながら、きめ細かくフォローします」

院長　**森若 文雄**

もりわか・ふみお●医学博士。北海道大学大学院医学研究科神経内科学助教授、北海道医療大学言語聴覚療法学科教授を経て現職。日本神経学会認定神経内科専門医

充実したリハビリスタッフが、理学療法、作業療法、言語療法で患者をフォロー。

防音室での音響分析。病態の臨床研究に活用している。

オレンジと白の市松模様を敷き、患者が意識して跨ぐことで歩行の向上を目指す。

難病に悩む患者の最後の砦として

同院は「神経難病に関する病因・治療の研究」をもう1つの理念に掲げ、北海道神経難病研究センターを併設している。「大学と共同で、長年にわたり臨床研究を行っています。また、看護やリハビリテーションなどによる患者さんのQOL（生活の質）の向上を追求しています」と森若院長は話す。

同センターではリハビリテーションと緩和医療の研究を主軸とし、周辺医療機関のスタッフと協力しながら、研究会などを定期的に開催。ADLの低下しやすい神経難病患者の生活の改善に結びつくような看護、リハビリの研究と発展を志している。「私達が神経難病の患者さんを支えるのだという、開院当初からの信念を、スタッフが共有しています。神経難病は治癒しにくいからといって、治療法が無いわけではありません。そのような患者さんにこそ私達が付き添い、スタッフ一丸となって決して諦めることなく、ベストを尽くします」

取材／滝戸直央